



ミンガラバーMJET News Letter

13-3-504, Minami Motomachi, Shinjuku-ku, Tokyo Japan 160-0012
Tel: 03-3353-6377, Fax: 03-3353-6377, E-mail: info@mjet-tokyo.com



2019年度植林ツアーを実施！

8月17日から26日まで、2019年度のMJET植林ツアーを開催しました。植林ツアーにはMJET正会員6名、学生会員1名に加えて、一般の学生3名、社会人10名（内子供2名）を含む13名が参加して、合計20名がKone Tan Gyi村と、Phyauk Seink Pin村で、計526本の苗木を植林しました。今回の植林ツアーでは以下のような特徴がありました。

Kone Tan Gyi村で183本を植林

Kone Tan Gyi村では、村長さん以下村人80名が参加して、村の裏側の場所に、すでに自分たちで植林していた広場に、新たな場所として3か所の植林用地を準備しており、そこに183本を植林しました。



Phyau Senik Pin村で343本を植林

Phyau Senik Pin村では、今回、新しい土地が提示され、343本を植林しました。100名の小学生がMJET参加者と一緒に仲良く植林を行いました。



学生部が小学校の環境教育を実習

タンシンチェ村の小学校5年生に、理科の教科書に沿った実験に必要な試験器具を寄贈して、「光の性質」について、プリズムを活用した実験を含む「環境教育」の実習を行いました。子供達の反応は大変良く、先生もこの双方向教育に大変興味を持ちました。



エキサイトしたChaukkan村での運動会

Chaukkan村では、運動会は三度目で、全校生徒280名が参加しました。全校生徒は紅白二つのチームに分かれて、玉入れの後に続いてサイクロンの目、パン食い競争、ムカデ競争、紅白リレーの5種目に熱狂的に参加し、「がんばれー」、「がんばれー」の声援が飛び、興奮し、熱中しました。今年の新種目は「パン食い競争」と学年別「紅白リレーでしたが、リハーサルでやり方を覚えて、自分のチームが勝つように、必死で応援していました



卒論の研究テーマを探す学生による野外調査

今回は、立命館大学から学生1名が参加して、「成長する観光産業が、近隣の村々にどのような影響を与えているか？」というテーマを取り上げました。近隣の村を世界遺産に含まれる村、隣接する村および離れた村の3つに区分し、それぞれウエストパツソ一村、コンタンジー村、インダイン村を選んで、各村の村長と3人の村人に対して、インタビューを行いました。他の学生3名も村人へのインタビューを分担して参加しました。この研究のインタビューでは大変有益な情報が取得されましたので、分析の結果が楽しみです。





ゴミ収集処理をワークショップを開催！ インダインモデルの普及を实践

場所：コンタンジー村集会所
最初に安田先生が過去5年間にバガン地方の水門調査の結果を参加者の村人に「バガン地方の降雨パターン」について、セミナーを行いました。降雨パターンは農民にとって、非常に重要なことなので、熱心に聞いて、ノートをとっていました。

続いて、昨年同様、5つの村から村長と村人が参加して、この1年間のゴミ収集処理の事業がどの程度進んだかをお互いに報告しました。最後に、参加者がもっとも進んでいる村を2つ選び、その結果、以下の3村が選ばれました。

- 1位：インダイン村
- 2位：コンタンジー村
- 3位：タンシンチェー村

優れた進捗状況にある村を称えて、MJETは音色の良い「南部鉄の風鈴」の記念品を贈呈しました。



Phyau Senik Pin 村での交流会

今回、植林を行ったPhyau Senik Pin村で村人との交流会を開催しました。村人は社会人と小学生の踊りをそれぞれ4組、計8組も準備して交流会を盛り上げました。MJETからは日本語の歌、少林寺拳法の型、ポップダンス、ソーラン節の踊り、盆踊りを披露しました。特にりんたろう君とさくらちゃん兄妹のソーラン節は、素晴らしく大勢の村人が集まり、各演目の度に大きな拍手が沸き、大盛況でした。



特集1：ミャンマーの教育と人づくりの課題

植林ツアーの事前学習として、7月20日に城西大学国際教育センターのティティレイ准教授に表記のトピックについて、概略以下のような講演をいただきました。

1988年の政治運動以降、教育レベルは急激に低下しました。世界銀行のデータによると、2013年度教育への支出はGDPの2.1%で、ミャンマーを除くASEAN諸国の平均がGDPの3.6%に比べると、かなり見劣りする状況にあります。

2015-2016年度のセーダン試験（高校卒業試験兼大学入学試験）の結課では、受験者数636,237人にたいして、合格者数は190,388人で、合格率は29.92%です。また、義務教育はなく、低い教育費の支出のせいで、1年生から始める120万人の学生のうち、11年生（高卒レベル）まで通う生徒はわずか46万人（全体の38%）にとどまっています。

このため、JICAの協力を得て、2016年6月から基礎教育の11年制度（5-4-2）から12年制度（6-3-3）への移行が始まりました。この計画では、2016年から現在の5才で1年生が幼稚園生になり、6才の2年生が1年生になると言う具合に調整され、2018年に17才で12年生（高校3年生）に変更になるというものです。

Age	Primary					Middle					High				
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17		
2015	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11				
2016	KG	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11				
2017	KG	G1	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11				
2018	KG	G1	G2	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11				
2019	KG	G1	G2	G3	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11				
2020	KG	G1	G2	G3	G4	G6	G7	G8	G9	G10	G11				
2021	KG	G1	G2	G3	G4	G5	G7	G8	G9	G10	G11				
2022	KG	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G8	G9	G10	G11				
2023	KG	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G9	G10	G11				
2024	KG	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G10	G11				
2025	KG	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G11				
2026	KG	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10				
2027	KG	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11			
2028	KG	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	G9	G10	G11	G12		

No Graduate from High
No Graduate from High Reform Completion

(図1：教育制度移行図1 講演資料より)

また、教え方も「従来の暗記教育」から、「自分で考えて行動する」という方法に変わります。民間の学校も許可され、海外からの投資による外国式のinternational schoolも認められるようになりました。

Yangon Academy



KUMON MYANMAR





mj et

ミンガラバーMJET News Letter

13-3-504, Minami Motomachi, Shinjuku-ku, Tokyo Japan 160-0012
Tel: 03-3353-6377, Fax: 03-3353-6377, E-mail: info@mjet-tokyo.com



特集2:ラカイン州のロヒンギャー問題とは？

藤村建夫

ロヒンギャー問題の背景

ロヒンギャー問題というのは、植民地時代に引き起こされた歴史的な原因に基づいています。ミャンマーの西部に位置するラカイン州は、もともとアラカン王国という独立していた王国でした。アラカン王国の領土は今のチッタゴン地域まで含まれており、その当時は仏教徒とモスLEMは平和的に共存していました。アラカン王国は、1784年ビルマ族のコンバウン王朝によって滅亡し、ビルマ族の王国に併合されました。1826年、コンバウン王朝が第一次英緬戦争に敗北した結果、ラカイン州がイギリスの植民地になったことから、問題が発生しました。

植民地政府は、コメ等の農産物や石油等の鉱物資源生産を増やすために多くの労働者をインド(現在のバングラデッシュとインド)から数十万の単位で、季節労働者として連れてきました。その中には帰国せずに居残った人達がいる、その人数が、以後どんどん増えていったのです。これらのベンガル人(当時ビルマ人はそう呼んでいました)は、イスラム教を信奉しており、その人数が増大するにつれて、植民地政府が彼らに与えた土地その他の便益が徐々に問題となり、ラカイン人とモスLEMとの対立が激しくなりました。

両者の対立は、第二次大戦中に、イギリス軍がモスLEMに武器を与え、日本軍がラカイン人に武器を与えたことによって、両者の武力衝突がおこり、20000人のラカイン人が殺害されたといわれ、両者の対立は決定的なものとなりました。

戦後になって、ベンガル人は自らをロヒンギャーと呼ぶようになり、ラカイン州の北部における自治要求を主張するようになりました。これに対して、1950年代、時のウ・ヌー首相が彼らの要求の一部を認めようとしたが、1962年に政権を取ったネ・ウイン大統領は、彼らを弾圧しました。

国籍を持っていない理由とは？

以来、ミャンマー政府は「ロヒンギャー」という言葉認めず、「不法移民のベンガル人」と呼んでいます。つまり、彼らは現在のバングラデッシュ東部に住むベンガル人が植民地時代以降に、不法に移民してきた人達であるとしています。1982年の国籍法を制定する時、古来からミャンマーに居住している135の民族には入らない、人々であると、規定しました。これによって、ラカイン州北部に住むモスLEMのロヒンギャーの人々、約100万人は国籍を持たないという身分の不安



ミャンマー・ラカイン州のロヒンギャー族

■ ロヒンギャー多数 ■ ロヒンギャー少数

定な存在になりました。

1982年の国籍法の制定によって、ロヒンギャーの不満はますます高まっていきました。2012年に仏教徒の女性がモスLEMの男性数名にレイプ、殺害された事件が発生し、これが引き金となって、モスLEMのロヒンギャーと仏教徒のラカイン族の関係は急速に悪化していきました。同時に、ロヒンギャーの中から、国籍法に反発して武装闘争に走るグループが発生し、2016年には、「アラカン・ロヒンギャー・救世軍」(ARSA)がモスLEM住民を動員して、6カ所の警察支署を襲撃する事件が起き、これに対して、国軍、国境警察、警察が反撃しました。

次いで、2017年8月25日にはARSAが、ロヒンギャー住民を動員して、ラカイン州北部にある、30カ所の警察支署等を襲撃しました。これに対して、国軍、国境警備隊と警察が反撃して、8月25日から9月4日まで、掃討作戦が行われました。このため、ロヒンギャー住民の住居が放火されたことにより、70万人以上のロヒンギャー難民がバングラデッシュに押し寄せ、国際社会に衝撃を与えました。

現在、バングラデッシュ政府とミャンマー政府の間で難民の帰還が進められていますが、未だ、実現しておらず、中長期の対応が必要とされています。